

---

# 夜明けのカメレ レ レオン

みっち～6画

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜明けのカメレ レオン

### 【Nコード】

N1787X

### 【作者名】

みっちゝ6画

### 【あらすじ】

クラスに君臨する姫と、反骨精神のカタマリのようなあたし。学校は平和なところなんかじゃ、ない。6年前、泣き叫びながら児童相談所に連れて行かれた梶間も、すっかり別人になって「ココ」に戻ってきた。あたしは何が変わったの？ それとも、これから変わっていくの？

？ 田んぼの中のお姫さま。

満開のサクラ、サクラ。

生暖かい風が吹くたび、ゆらゆら、ひらひら。

中学二年になったばかりのあたしたちは、桜色にそまつた教室の中で……何もかもに、おびえていた。

『生活指導の丸山が辞めたのってさ、姫が絡んでるって聞いたか？』  
『あ、知ってる。三年の優子先輩たちのグループとやり合って、仲裁に入った丸山に訳の分からない因縁つけたって』

うちのクラスには、姫がいる。だれもかれも彼女の言いなりだ。教職二十三年の丸山は、すべての矢面に立たされた上に学校を去っていった。

『姫にも、姫ママにも、かわりたくねえ』

もちろん本当の話なんて、だれも知らない。丸山は一身上の都合でやむなく教職を辞したのだと聞かされたし、三年女子は今もぼんやり登校している。

信憑性も無いウワサを頭から信じるなんて、ばかみたい。

そんな反骨精神を抱いてしまったばかりに、あたしは通常授業の始まるころにはもう、クラスじゅうの女子にハブられていた。

姫の機嫌を損ねたら、今度は自分にターゲットの矢印が向いてくる。彼女と、彼女のばか親には逆らわないのが利口な生き方なのだろう。

間延びしたチャイムが鳴って、静まり返っていたクラスはわずかに息を吹き返す。

今日の姫は、朝からずつとふくれっ面だ。クラスメイトはもちろ

ん、教師陣でさえ、どこか探るように声を震わせていた。

話し相手のいないあたしは、何度も教科書を出したりしまったりを繰り返す。この前、寝たふりをして机に伏せていたら、「ねえ？ 本当は起きてるんでしょ」と意地悪く声をかけられたのが、利いている。

「やだ。水嶋さんて、話す相手もないんだ？」

かわいらしい声をして、残酷なコトバをたたきつけてくるのだ。容赦なく。この、ど田舎のお姫様は。

ちろり、と姫の視線があたしを射抜く。

「また……水嶋さんって……ふふふ、ねえ？」

取り巻きの小者たちと、ひそひそ笑い合っている。

ああ。もうイヤダ。勝手にして。

あたしは視線をグラウンドに落とした。こんなぐるぐるした世界なんて、さっさと飛び出してしまいたい。

幼いあたしとぐうたら親父を捨てた、母さんみたいに。

## ？体育教師と紺ジャージ。

窓辺が、どつと沸いた。すばやく辺りを見渡すが、今はあたしが笑われているのではないらしい。小さく息をついてから、皆の視線を追った。

「待て！ 許さんぞ、おまえ！」

紺色ジャージを着込んだむさくるしいヒゲ親父が、グラウンドを全力疾走している。

「あれって、コヤマじゃね？」

だれかがあきれたように、笑った。確かにそのむさい後ろ姿は、体育教師のコヤマに違いない。ぎりぎり二十代の熱血教師で、女子からの人気も高かったはず。親身になって相談に乗ってくれるというので、男子にとっては兄貴のような存在らしい。

だが。どうして。その彼が、サイズの合わない生徒用の紺ジャージを着ているのか。

「あはは。逃げる、逃げる。だれだか知らんけど、逃げるー！」

男子らが、無責任に声をかける。コヤマの前を颯爽と駆けていた男が、後ろ姿のままピースサインで答えた。

「きやはは、なにあれえ」

ふんぞり返ってふてくされていた姫までもが、窓枠にはり付いた。「足、速あい。ちよつとカッコいいね？」

姫の声音に、甘い響が混じった。

「待て、待て！ 待てって……」

息も絶え絶えのコヤマが走るたび、つんつるてんのジャージの裾から分厚いすね毛が見えている。

「コヤマちゃんは、かつこ悪い」

完璧なラインの姫のまゆ毛が、ピクリとはね上がった。

「転校生かな？ だって、いたらすぐ分かるよね？ あんな目立つ

コ」

ついにコヤマは、サッカーゴールの前まで相手を追いつめた。

「お？ やるじゃん、コヤマン」

ぴっちぴちのジャージ姿をさらしたばかりに、一気に格下扱いにまで落ちぶれたコヤマは、ヘタなフェイントよろしく、左右に体を振っている。

相手の顔が、真正面から見えた。

やっぱりこの学校の人間じゃない。口元に微笑をたたえてはいるが、細い目元にはどこことなく暗い影がある。そもそも、この学校の制服を着ていない。

「逃げて、逃げて！」

「コヤマ先生、もうカンベンしてあげて〜」

黄色い声援が、あちこちの窓辺から投げかけられる。

なんか嫌。

あたしは、すいっと席を立った。転校早々こうも皆に受け入れられるなんて、なんだかちょっとキツイ。

「あつ、捕まる！」

女子らの声援を一心に受けたにもかかわらず、男はコヤマの太い腕に組み伏せられ笑いながら降参した。その視線がすいっと、窓辺を駆け上がる。

「おお、久しぶりじゃね？ 水嶋さん」

## ？離れ小島に浮かぶ花。

だれ？

あたしの動揺なんかお構いなしに、転校生は白い歯を見せて笑った。

「え？　なんで水嶋？」

無遠慮なざわめきを背景に、あたしは窓枠からすばやく身を引いた。騒動のど真ん中から声をかけられる……こんなストレス、耐えられない。

始業のチャイムがカラコロ鳴って、男は怒り狂って真っ赤になったコヤマに引きずられて退場していった。グラウンドをちろりと一瞥してから、あたしもみんなに紛れて座る。姫の視線が痛い。

姫いわく「ちよつとカツコいい」男の名が梶間なのだと知ったのは、その後のホームルームのことだった。やっぱり聞き覚えがない。コヤマと担任に挟まれるようにして引き戸の前で仁王立ちになった彼は、そこでもにやりと唇の一端をつり上げて笑ってみせる。

「お疲れ」

男子らがにやにや出迎えた。すでに仲間意識が芽生えているらしい集団の中に、するりと溶け込んでいくさまは見事としか言いようがない。窓際の最後尾に、ひとりだけはみ出るようにして座っているあたしなんか言わせれば、「信じられない」の一言だ。

「マジかよ！」

くすくす笑い合う声が、こっちまで聞こえてくる。なんでもシャワー中のコヤマの着替えを拝借し、だれとも知らない紺ジャージにすり替えたものらしい。鼻歌交じりにシャワー室から出てきたコヤマは、かつくりと口を開けたのだという。

担任の目を盗んで得意げに話して聞かせる横顔は、まるで幼稚園児だ。……いや、猿か。背もたれに反対に座って、黒板に背を向けているのだから。

「なあ？」

我に返ると、梶間があたしの顔をのぞき込んでいた。

「なんで水嶋さんはそんな離れ小島にひとりでいるの？」

最悪。姫のほおが、得意げに緩んだのが見える。

「なんで、って？ …… そんなの、あんたに関係ない」

「それ、ちよつとひどくね？」

背もたれにアゴをのせていた梶間の目元が、わずかに曇った。

「おれは、水嶋さんに再会できるのを楽しみにしていたのになー」

「待つて。あたしはあんたなんかに見覚えないんだけど」

片まゆを器用に持ち上げ、梶間は「そうかな」と自嘲した。

「忘れているだけのことだよ。おれは確かに水嶋さんのことを知っているし、水嶋さんはおれのことを絶対に忘れないからって、泣いてくれたよ」

「やめてよ！」

我に返ると、教室じゅうに響く声音で叫んでいた。

「おーい、水嶋あ。授業のときも、それくらいの大声を出すんだぞ」

のんきな担任の発言に、クラスが沸いた。例の梶間も、他人事のような顔でからから笑っている。

あたしは唇を引き結んで、机にできた古いインクのしみをにらみつけた。



## ？目的地のないバス。

その夜は布団にもぐりこんだ後も、なかなか寝付けなかった。まぶたを閉じて、浮かんできるのは梶間の顔ばかり。

「なんなのよ、まったく」

こみ上げてくるいら立ちを押さえることができずに、何度も起き上がってしまう。担任の小言を聞きながら、ひらひら手を振ってきただ彼の大きくて細い指先。あたしを見つめる、色素の薄いグレイッシュブラウンのひとみ。

「待つて」視線の先をぐるぐるさまよわせながら、あたしはサイドテーブルに放りっぱなしだったフリースを引き寄せる。

「あの目、見覚えがある。でも……違う？ ……違うか。うん、違う。あの子の名前は、梶間じゃないもの」

小学生のころ、近所にヒデと呼ばれる子が住んでいた。病弱で線の細い、小鹿のバンビのようなかわいらしい雰囲気をもった男の子だった。同じ歳だったこともあって、ずいぶん仲よく遊んだものだ。

「最後に会ったのは、たしか……」

六年前、小学二年の夏のこと。彼の家では両親が離婚して、親権を争って裁判にまで発展した。結局、経済力を加味された父親が親権を獲得し、それを不服に思った母親が息子を誘拐して事件になった。

「そうよ、上林英嗣」

あれだけ仲がよかったにもかかわらず、事件のこたごたのせいで最後にどんな別れ方をしたのか、思い出せない。

「あんな猿みたい男といっしょにしたら、ヒデちゃんがかわいそう」

争いごとが嫌いで、いつもどこか泣き出しそうにみんなを見上げていた彼のひとみには、世界はどんなふうに映っていたのだろう。

「とにかく！ もう寝ないと」

その前に、とあたしはもう一度ベッドに半身を起こした。目覚まし時計をセツトし直していると、本棚の隅に突っ込んであった小学校の卒業アルバムに目が止まった。ぱらり、ぱらりといく枚かめくっていく。

「あつた。これ、これ」

一年の入学祝いの集合写真の豆粒の中に、指先を這わせた。

「よく見えない……でも、これかな？ これは……」

ぶつぶつこぼしていると、玄関のカギをがちゃがちゃ開ける音が聞こえてきた深夜まで働きづめの父さんが、ようやく帰宅したらしい。慌てて電気を消して、布団をかぶる。息を殺してじっとしていると、どこか短い廊下を歩く音が近づいてきて、無遠慮にドアが開け放たれた。

「花梨？ 寝たのか？」

わずかな間があつて、再び部屋は暗闇に戻った。用意しておいた夕飯をレンジで温めている間に冷蔵庫を物色し、隠しておいたビールを探し当てたようだ。鼻歌交じりに栓を開ける音を聞きながら、あたしは夢の世界に落ちていく。

その夜見たのは、行き先のかかれていないバスに乗る、いつもの夢だった。

？はね上がる白球。

安アパートの朝は、慌しい。隣人が階段を行き来する音で目が覚めたのは、五時を少し過ぎたころだった。玄関からすぐの台所に布団をしいて寝ている父を揺り起こしてからトイレに入り、出てくるころにはもう卓袱台には食パンが並べられていた。

「花梨、ジャム付けるか」

ふた間しかないアパートでの父娘共同生活も、もう五年目に突入だ。

「うっん、父さん付けたら？」

「ああ、うん。悪いな」

ぼりぼり腹をかいいた父は、あくびをかみ殺した。

「父さん、時間は？」

「おう、行ってくる」

がちやりとカギをかける音が響いて、あたしはまたひとりになった。手早く皿を片付けて、部屋じゅう散らばっている洗濯物を拾い集める。父さんは、何度言っても脱いだものをそのまま投げ出してしまう。よく言えば「豪快」、そうでなければ「だらしない」。

細々した片づけをしていると、古い柱時計が六時を告げた。

「あ。あたしも、行かないと」

自室にしている四畳半に戻り、ため息をひとつ取り落とす。今日も、長い一日になりそうな予感がする。

「はい！ こっち！ きゃあ〜」

グラウンドには、すでにクラスメイトがそろって歓声を上げていた。砂ぼこりが舞い散って、いくつものバレーボールが飛び交っている。

春の交流行事の一環として、我が学年では球技大会を行うことが決まっているのだ。ひととき目立つ桃色のジャージに身を包み、ほ

おを朱色に染めた姫が、きゃあきゃあ言いながらみんなを取り仕切っていた。

とりあえず、かばんを下ろしてグラウンドに踏み入った。朝練習をすることに決まったのはいいが、体を動かすのが苦手なあたしは身の置き場がない。目だけを動かして、皆の様子を探るが、だれもかれもあたしがいることに注意を払う者はいなかった。

「ああ、カジ君！ おはよう」

文字どおり、姫が飛び上がる。

「ハヨ。みんな早いねえ。眠いよ」

梶間が大あくびをしながら、のろのろ歩いてきた。ひとりだけよその中学の制服姿というのに、妙に堂々としている。すたすた大またであたしの横を通り抜け、みんなの中に合流した。

「転校早々ごめんね、忙しくなっちゃって」姫がしなだれかかった。「いや？ おれ、バレー大好き」

長身の彼のことだ、本当に得意なのだろう。梶間はうれしそうにブレザーを脱いだ。男子らが、こっちこっちと手招いて彼を呼ぶ。

そんな光景をぼんやり見つめながら、あたしはそっと校舎に駆け込んだ。

始業まで、何をしていればいいんだろう。

## ？大地のリズム。

「やっぱり、ですね？ 全員が楽しまないと、意味ないと思うんですよねー」

満面の笑みをこぼす担任の前で、姫はふにやりと小首をかしげた。「強い人だけ集めてチームを組んでも、だめなんですよ。四つのチームの力を均等にして、『捨て』チームがないようにしなきゃ」分かったから、とあたしは心の中で舌打ちする。そんなの、初めにチームを組んだときから散々言われてきたことだ。そんな前置きはいいいから、大好きなカジ君といっしょのチームに組み直してっ、はつきり言えばいいのに。

「そうですよ！」担任は、両手を打ち鳴らして小躍りした。「そのとおり。みんなが楽しむことに、意味があるのです」

ああ。それ、さっき姫が言ったから。両手の上にほおを乗せて、あたしはひとりだけ窓辺に顔を向ける。

どうしてみんな姫の言いなりになるの？ あんな子、放っておけばいいのに。

散り急ぐ桜の花びらが、土ぼこりの上でくるくる舞っている。

本来なら、初夏に計画されている修学旅行の話し合いをする時間のはずだった。古い机に指先で「日光」と書くと、唇をとがらせる文字どおり母さんに捨てられてから、父さんは驚くほどの勢いで働き始め、毎年あたしの夏休みのカレンダーはラジオ体操で埋め尽くされた。いくら女子じゅうにハブられていようと、旅行と聞くだけでわくわくしてしまうなんて、あたしもまだまだ子供ということか。

自嘲気味に黒板に目をやると、意気揚々とチョークを握った姫が、新たなチーム分けを書き込んでいる。想像どおり、姫と梶間は同じチーム。あとは運動神経のいい男子と、仲のいい取り巻きで固めてある。

担任もクラス委員も、姫の暴走を止めてはくれない。イライラしながら机に指を打ち付けていると、同じリズムの音が耳に飛び込んできた。

クラス委員の、徳島祐だ。驚いたことに、彼はホームルームが中断されたことに腹を立てているらしい。いつでもうつむいて、上履きの先つちよをにらみつけている彼にしては珍しい。

まじまじ見入っていると、視線に気づいた彼は、ばつが悪そうに小さく肩をすくめた。イライラしても仕方がないさ。そう言われているような気がして、あたしは唇をゆがめて苦笑する。

「水嶋さん」

姫の鋭い声が、あたしの肩を震わせた。

「ちゃんと話し合いに参加してください！ 聞いているんですか？」  
長いまつ毛をばしばしさせて、姫は最初にあたしを、次に徳島祐を激しくにらみ据えた。まるで、すべての人間が自分に注目していないと、世界が滅亡するとても信じ込んでいるみたいに。

「なんだ水嶋。おまえは、クラスの一員としての自覚が足りないな」  
無神経な担任のことばが、あたしの胸をえぐっていく。指先のかなでるリズムが、鼓動よりもずっと早く、大きくなった。

？泣いても泣いても、終わらない。

ささやかなあたしの反抗に対する姫の報復は、それはそれは見事だった。まず、自分用に確保していた数人をチームから外し、ひとつに集め出した。

性格がきつくてみんなから恐れられている野球部男子を筆頭に、サッカー部のもてもてエース、女子嫌いで有名な水泳部の新鋭などをつぎ込んで男子だらけの最強チームを作り上げた。あげく、六人目に選んだのは運動音痴の水嶋花梨……つまりあたしだ。

「なんで水嶋？」

またしても、あたしの大っ嫌いなことばでホームルームは終了。なんで水嶋、だって。なんで？ そんなのあたしが聞きたいわ。

「あのさ、その……ごめん。ぼくのせい……だよな？」

クラス委員の徳島祐が、目も合わせずにうつむいた。

「ううん。違う。だってそっちのほうも……ヒドイもんでしょ」

ほんの少しあたしに構ったばかりに、徳島祐はギャル系女子ばかりの恐ろしくはでなチームに黒一点として入れられた。びくびくしながら彼女たちに付いていく後ろ姿を見送りながら、あたしはこれから待ち受けている練習を思っ、ため息を取り落とした。

「カジ君！ 練習して帰ろうよお」

姫の甘ったるい誘いをけって、梶間は「ごめん」と片手を上げた。「まだ引越しの整理が終わってないんだよね」

「あ。じゃあ、手伝うよ？」

いいって、と梶間はするりと教室を抜け出していく。手馴れたものだ。梶間はクラスじゅうと仲良くやっているように見せかけて、それでいて深いところにはけっして踏み込もうとはしない。

「水嶋！ おい、聞いてんのか！ いくぞ、練習だ」

太い声音の野球部男子が、あたしの首根っこをつかむ勢いで腕を伸ばした。

「ごめんなさい！」

首をすくめながら慌てて駆け出そうとするあたしに向けて、今度はサッカー部のエースが口をはさむ。

「ちよつと、おまえさ。そのかつこうでバレーする気？ マジで？  
かんべんしてよ」

くすくすくす、と梶間に逃げられた姫が意地悪く笑った。

「おれたち先に行ってるから、着替えてこいよ。すぐにな！」

水泳部の新鋭が、にこりともせず命じてきた。

その後の練習は最悪だった。ジャージに着替えたあたしに向けて、わざわざ水の入ったバケツを抱えた姫の手下が体当たり。びしょぬれになって再び制服に着替えたころにはずいぶん時間が経ってしまい、さらに「着替えていない」あたしを見た男子らの怒りは頂点に達した。

「なんなの、おまえ？ 何がしたいの？」

「ごめ……」

「いいから、さっさとコートに入れよ」

唇をかみ締めながら白球を目で追ったが、彼らは一様にあたしなんかボールを回すことはしなかった。



## ？微熱のウワゴト。

頭が痛いので、とドア越しに父さんにつばやいてから数十分が経ったころ、食パンにたつぷりジャムを塗った朝食が運ばれてきた。

「なあ、花梨。薬があつたはずなんだがな、ほら、父さんが風邪引いたときにもらったやつ。どこかにしまったはずなんだけどなあ。見つからないんだ」

珍しく弱音を吐いた娘のことを、父さんなりに心配してくれてくれるらしい。

「ありがとう。でも、あたしはもう大丈夫。ちゃんと食べて、学校に行くから」

忙しい父さんに心配かけちゃ、だめ。無理に笑みを作ろうと、口角をつり上げる。

何度も振り返りながらドアを閉め、父さんは力ギをかけた。いつてらっしゃい、とつぶやきながら布団をかぶる。朝練習なんて、行きたくない……。

「なんなの、おまえ」

開口一番に、野球部男子があたしを指さした。

「おまえがいい加減なのは勝手だけどよ、そうするとメンバーのおれたちが迷惑するんだよな」

「じゃあさ。いつそのこと大会の日、休んでくれる？ ははは」

「いいね、それ。梶間とか川原あたりの、運動神経のいいやつを助っ人にしてさあ」

「おお！ ベストメンバーじゃね？ 三年にも勝って、優勝しちゃうかも！」

始業チャイムぎりぎりに教室に滑り込んできたあたしなんか放っておいて、男子メンバーたちは楽しそうに笑い始めた。

そそくさ席に向かうあたしを、梶間の視線が追ってくる。なによ

とばかりに振り返ると、梶間の長い指が、あたしの目の前に伸びてきた。

「水嶋さん、もしか熱ある？ 顔、赤いけど」

ああ、だめだ。そう思ったときにはもう、世界がぐによりとゆがんでいた。

「ちよつ、うわ！ 保健室！」

梶間の力強い腕が、あたしの体を持ち上げる。

やだ。あたし、こんなやつに運ばれたくない……。

「このまま少し休んでいこうか」保健の良子先生が、まゆをひそめた。体温計に目を向け、名簿に何かを書き記しながら、ベッドの準備をする。無理したんでしょ、と強い口調でたしなめて、あとは自分の机に戻っていった。

昨日、水をかぶったまま運動したのが悪かったらしい。それでも、放課後の練習を休む口実ができたのはうれしい誤算だった。

二時間目のチャイムが鳴ったところ、だれかが保健室に飛び込んできた気配がした。ぼんやりまぶたを持ち上げて、耳をすます。

「え、水嶋さん？ もちろんいいわよ。でも今は、眠っているかしらね……」

慌てたあたしは、頭まで布団を持ち上げた。まさか、このあたしを訪ねて保健室まで見舞いにくる人間がいるなんて。

「おい、寝てる？」

声をかけてきたのは、調理実習のエプロンを付けた梶間だった。

## ？エプロン姿の王子様。

変なの、と開口一番つぶやいた。

「そう？ でも、エプロンしなきゃ実習させないって、センセイが言うんだよね」

「違うよ。そっちじゃなくて……その、お見舞いってこんな感じなのか……って」

そうか、と梶間が破顔する。笑うと妙に幼い表情になることに、今さらながら気がついた。姫の誘いをするりとかわす彼の姿が、ふと脳裏によみがえる。

「どうしてあたしに構ってくるの？」

梶間は、ぽかりと口を開けた。

「それって、マジで言ってる？ ……ああ、そうか。やっぱりなあ、そういうことか」

自分だけ分かってます、といった風情で梶間は何度も首を振る。

「まあ、うすうすそんな気はしてたんだけどさ。まさかねえ」

「だから、何の話よ！」

「それそれ」

梶間は指先をあたしのほうに向け、唇の一端をつり上げた。

「水嶋さ……いいや、花梨ちゃんはまだく変わらないね。眉間にぎゅーって、シワを寄せながら話すの。気が強くて、いかにも正義の味方って感じでさ。……ね。そろそろ思い出してよ、おれのこと。寂しいじゃん？」

頭が混乱した。梶間は、昔のあたしに会ったことがあるらしい。アイリッシュブラウンのひとみが、優しい光の中で揺れた。

「その目」そつと唇をかむ。「見たことがある……気がする。もしかしたら、ヒ……」

デ、と続けようとしたあたしの唇が止まる。

「カジ君！ どこに行ったの？ クッキー焼きあがったよお？」

甘ったるい声が、廊下を駆け抜けてくる。梶間はまるで構わず、あたしから視線をそらさない。

「姫が、探してる」

あたしのほうが動揺して、入り口に顔を向けた。

「花梨ちゃん。もしかしたら、の続きは？」

「そんなことより、姫が……」

ベッドサイドにしゃがみ込んでいた梶間は、深いため息と共に立ち上がった。保健の先生に短いことばをかけてから、するりと引き戸に手をかける。

「あ……」

思わず声がもれた。

何、と梶間はわずかに唇をとがらせる。

「……あ。その、ありがとう」

「いや、いいよ」大きな背中を向けたまま、梶間はわずかに沈黙した。「じゃあ。……水嶋さん」

建てつけの悪い引き戸を抜けて、きやあきやあ梶間の名前を呼ぶ姫の甘い声音が近づいてくる。

「今日の練習は休むって、あいつらには言っておくから」

梶間のいないがらりとした保健室に、次の授業の始まりを告げるチャイムが鳴り響いた。

## ？泥だんこの賞味期限。

保健室を出て、右に曲がる。で、また右に曲がる。そこがあたしの教室だ。せめて気持ちの整理がつくぐらい、遠かつたらよかったのに。十分すぎるほど時間を置いてから来たというのに、放課後の教室はまだ笑い声でいっぱいだった。

引き戸の前で深呼吸をしてから、そろそろと利き手を伸ばす。

「おい。そこ、じゃまなだけど」

太い声が背後から聞こえたと思ったら、あたしは体ごと吹っ飛ばされていた。見直すまでもない。きつと、最強バレーチームのうちの……ダレかだ。

甘ったるい香りが、室内を覆っている。あたしの机の上には、黒ずんでぺしゃんこになった調理実習の失敗作が投げ出してあった。周りには、カップケーキやクッキーの食べかすが、これ見よがしに落ちている。

くすくすくす、いつもの笑い声が耳に届いた。どうしよう、これは受け取るべき？ ぼんやり考え込んでいたら、窓辺で梶間がまどろんでいるのに気づいた。だらしなくブレザーを着くずし、片手にアゴを乗せている。

伏せたまつ毛は、もしかしたら、すっぴんの姫よりも長いかも知れない。

ヒデちゃんも、まつ毛の長い子だったな。

見つめすぎていたせいか、梶間がゆったりとまぶたを持ち上げた。「どうしたの？」

見舞いに来てくれたのと同じ、やんわりとした口調でそのまま首をかしげる。もしかしたら怒らせてしまったのかも、と後悔していたが、どうやらそうではないらしい。いや、そもそもそれほどまであたしに関心がないのかも知れないけど。

机の上に置かれた「悪意のカタマリ」を隠そうと伸ばしたあたし

の手を、梶間の骨ばった指が引つつかんだ。

「ちょ……」

あせったあたしは、またも姫のいる辺りに視線を滑らせる。

「ひでえな、これ。だれが作ったんだ？」

真っ黒焦げのクッキーモドキをつまみ上げ、梶間はポイっと口の中に放り込んだ。

「苦げええ！」半ば絶叫のようにむせ返り、「いや、でも中のチョコはうまい？」と、けらけら笑い上げる。

「やだ！ カジ君。そんなの食べちゃだめだよ！」

慌てた姫が、タオルを持って駆け寄ってきた。

「吐いちゃって！」

やけに真剣な目を見ていたら、本気で不安になってきた。何を入れたんだ、この女。

「大丈夫、大丈夫。おれ、泥だんご食ってもヘーキくらい、腹は強いんだ。ね？」

最後にあたしに向けて笑いかける。

「なんで水嶋さんに……」

不満げにつりあがった姫のまゆ毛を見つめながら、あたしは思い出していた。

「そうだ、ヒデちゃん。……砂場で作った泥だんご……食べて……」

彼は、幼なじみの上林英嗣……ヒデちゃん、なのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1787x/>

---

夜明けのカメレ レ レオン

2012年1月12日20時51分発行